



大倉峠 昔



山毛櫨ヶ平山 昔



山毛櫨ヶ平山 今



大倉峠 今

松涛

№.33

2016. 3. 10

主な記事

同窓会長挨拶	2
学部長挨拶	2
農学部を去るにあたって	4
今年度の活動計画	5
支部だより	6
職場紹介 日本ハム惣菜株式会社	10
ペンリレー 同窓生からのたより	11
佐渡演習林60周年記念式典開催	13
農学部フォーラム	14
国際交流	15
同窓会計報告	16
学部だより	17
最近の農学部の就職・進学動向	20

同窓会長挨拶

同窓会長 進 藤 隆



昨年、大学改革実行プランについて新村前学部長のお話を紹介しましたが、春の全学同窓会

理事会で高橋学長より「平成28年度国立大学法人運営費交付金における3つの重点支援枠について」の説明がありました。それによりまずと国立大学法人は重点支援枠を3グループとし、重点支援枠①は新潟大学等55校、重点支援枠②は東京芸術大学等15校、重点支援枠③は東京大学等16校となるそうです。

重点支援枠①は主として地域に貢献する取り組みとともに、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色ある分野で世界・全国的な教育研究を推進しする取組を中核とする。

その支援枠の条件を達せすべく新潟大学では「将来展開に向けた機能強化基本戦略」で農学部役割として「食料安全保障への貢献など、農業分野を中心とした連携・融合研究と人材養成」と明示しています。

この変革の時に農学部の藤村忍准教授が「日本畜産学会賞」受賞、佐藤努准教授が「第16回酵素応用シンポジウム研究奨励賞」受賞、中野和弘教授が「日本農業工学フェローの称号」を受彰と顕著な業績を上げておられ、農学部の発展に貢献しております。

一方、日本農業に大きな影響を及ぼすTPP大筋合意で、従来の国内農業を関税で保護することの困難性が指摘され、「食糧の自給ができない国は独立国ではない」と言い切った外国の大統領がおりましたが、食糧自給とTPPを考えると時農業生産を支える農学部同窓生、教員・学生のさらなる飛躍が期待されます。

先日、佐渡農業高校に赴任以来お付き合ひしている逸見酒造をたずねた時、奥さんから農学部の卒業生が頑張っているよと紹介されました。丸田康輔さん（平成17年3月卒応用生物学）で、逸見酒造に志望理由は「自分で呑んで美味しいところで酒造りをし、小さな蔵で早く全行程を経験したかった」とのこと。確固たる考えをもっておられました。「真陵」で代表される酒は、島民に愛飲されており、かつ、昨年テレビで話題になった「至（純米吟醸、純米）」があります。秋から仕込みに励んでいるそうですが本人は「基本に忠実に、ぶれない酒造り」をモットーにしているようですが、将来は、新潟清酒の発展に寄与して欲しいと思っています。

若い同窓生が活躍している一例を紹介しましたが、このような意欲的で有為な後輩が数多く輩出されることを農学部の教育に期待するとともに同窓会としても若い会員を激励する機会を多くすることが大切と考え7月の総会で丸田康輔さんに「蔵人

となつて」と題して講演をお願いしています。ところで、学部の発展と有為な人材育成のために同窓会の果たす役割は小さくないと思います。

私は会長を2期8年務めさせて頂いたのですが今年度で任期満了となります。私は「8年間、何をやってきたのか」と現在、自戒の念にとられます。

会長としては、皆様のご協力で同窓会60周年で「嵐丘庭」の整備と記念式典、記念誌の発行を無事終えることが出来ました。また、新潟県内同窓生の親睦と帰

学部長挨拶

農学部長



農学部同窓会会員の皆様には、平素より農学部のために、多大なご支援を賜りましてありがとうございます。

どうぞございます。厚くお礼を申し上げます。この4月より、新村前学部長に替わりまして、農学部長を拝命しております渡邊剛志と申します。松涛の紙面をお借りし、ご挨拶を兼ねまして、農学部の近況を報告させていただきます。

平成21度から平成24年2月までの期間をかけて行われた農学部棟の耐震改修工事、そして農学部同窓会の60周年記念事業の一環としてご協力いただきました嵐丘庭の整備によ

属意識を高めるための県支部を発足させましたが、幸いにも渡辺前学部長、白井現支部長のご尽力で総会・懇親会には出席者が80人を超えるようになり大変感謝しております。

是非、新しい役員体制のもとで支部活動の活性化、若い世代が同窓会活動に積極的に参加できる体制確立のために会員一人一人のご支援をお願いいたします。

8年間、会員各位より賜りましたご指導ご支援に感謝申し上げますとともに、各位のご健勝とご活躍を願って会長挨拶とします。

渡 邊 剛 志

り、農学部の講義室や自習スペース、農学部の建物の周囲は見違えるように綺麗になりました。嵐丘庭に植えられた苗木も若木へと成長し、ゆっくりとですが順調に育っています。

また、農学部の耐震改修工事と連動するかのよう、農学部のすぐ斜め前にある新潟大学附属図書館も増築が引き続いて行われ、特に農学部

印象の建物に生まれ変わりました。そのため、農学部の建物の内部と外観だけでなく、農学部の周囲もすっかり様変わりし、学生たちは、明るく綺麗になった講義室や自習室でのびのびと学んでいます。

そのような、教育環境の著しい改善と裏腹に、運営交付金の減少が、多くの国立大学に厳しい試練となっ

てのしかかっています。新潟大学ばかりではありませんが、新潟大学は特にその影響を強く受けているようです。農学部におきましても当初配分の大幅削減が、年度の前半の学部教育に大変大きな混乱をもたらしました。その後の追加配分により、予算の状況はだいぶ改善されてきてはおりますが、来年度以降も予算面のさらに厳しい状況が続くことは確実で、教員一人一人にとっても、研究教育の継続のためには外部資金の獲得がますます重要になってきています。

また、国立大学は、平成16年に法人化されて、今年度は第2期中期目標期間の最終年度にあたり、改革加速期間と位置付けられています。そのため、多くの国立大学では様々な改革が進行しており、すでにいくつもの大学で、農学部の改組が行われています。新潟大学農学部においても、学部改組はまったなし状態で、それに向けた議論を今加速させているところです。

このような厳しくまた慌ただしい状況ではありますが、農学部及び農学部教職員は、教育の質を落とす事なく、むしろ農学部のさらなる充実と発展を目指して頑張っております。「農学部は頑張ってますね。いま農学部が学内で一番アクティブですね。」などという言葉を、他部局の教員や事務職員の方々から最近何度も聞いています。そのような農学部のアクティビティをお分かりいただくために、今年度行われた様々な活動の中で特に重要なものをいくつかご紹介いたします。最初は、最近特に活発になっており、また新潟大学農学部の重要な特徴となってきた

国際交流活動、グローバル教育についてです。

7月19日から22日までの期間、タイのチェンマイ大学で、第5回農学部国際シンポジウム「Green Technology in Agriculture: Chances and Challenges for a Better Life」が開催されました。これは新潟大学農学部が交流協定を締結している海外の大学と、3年に一回開催している国際シンポジウムで、今回はチェンマイ大学との共催でおこなわれました。新潟大学農学部からは、学生・院生約30人と教員10数名が参加し、チェンマイ大学の学生および教職員、交流協定締結校の寧夏大学、カセサート大学、タイグエン大学、モシアン生命科学大学、プトラマレーシア大学からの参加者とともに研究発表や情報交換を行い、特に学生にとって英語での発表とディスカッションを経験する非常に貴重な機会となりました。次回、3年後の農学部国際シンポジウムは、プトラマレーシア大学（UPM）で開催されることも決まりました。

また、昨年度末には、ロシア連邦を対象とした国費外国人留学生の優先配置プログラム「ロシア連邦極東地域における高度農業人材育成プログラム」が文部科学省によって採択され、この10月には初めてロシアから博士後期課程に留学生3名を迎えました。ロシア連邦を対象とした農学系の特別プログラム採択は、全国農学系国立大学で唯一ですし、ロシアからの留学生の受け入れは農学部としても初めてです。また、新潟大学農学部を中心としたトルコの大学との連携事業である、「経験・知恵と先端技術の融合による、防災を意識

したレジュリエントな農学人材養成」が、大学の世界展開力強化事業に採択され、中東における日本にとってのもっとも重要な国であるトルコとの連携が飛躍的に強化されつつあります。これによって、今後アンカラ大学、エーゲ大学、トルコ中東工科大学との学生交流、研究交流が活発に行われることとなります。

このような文部科学省の支援事業の採択と事業の実施に伴って、農学部は今年度に入って、農学部を責任部局とする国際交流協定を、あらたにロシア沿海州農業アカデミー、トルコ中東工科大学、エーゲ大学と締結し、現在全ロシア大豆研究所との部局間交流協定の締結も目前にしています。このように、これまで活発に交流が行われていた東南アジア、東アジア、スペインの大学に加えて、農学部の国際交流は、中東や中央アジアの大学にも広がりがつつあります。

以上、国際交流関係についてご紹介いたしました。もちろんそれ以外にも様々な活動が行われています。10月3日（土）には、佐渡島の「あいばーと佐渡」において、佐渡演習林の60周年記念式典が開催されました。農学部附属フィールド科学教育研究センターの「佐渡演習林」は、昭和30年に新潟県県有林の一部の譲渡を受けて設立され、これまでは農学部学生の実習施設として利用されてきました。平成24年には文部科学省の教育関係共同利用拠点に認定され、以来全国の他大学や新潟大学の他学部や留学生の実習も行っています。このたびの60周年記念式典には、高橋姿学長、土生木茂雄文部科学省高等教育局視学官、佐々木稔新

潟県佐渡地域振興局長、甲斐元也佐渡市長にご臨席たまわり、ご祝辞をいただきました。記念式典に続いて、記念シンポジウム、祝賀会、そして翌日には演習林の現地視察も行われ、演習林の長い歴史にふさわしい思い出深い記念事業となりました。

そのほか、第21回農学部フォーラムと第6回新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センターフォーラムのジョイントフォーラム「新たな技術で拓く資源循環型作物生産の可能性」（8月29日）、農学部が新潟県と協力して行っている「にいがた夢農業・人づくり事業」の企画である「米加工の可能性と農業の6次産業化」と題したシンポジウム（10月30日）、新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センターの国際シンポジウム「Frontiers in Plant Science and Biotechnology」（6月29日）が開催されるなど、農学部は活発に地域と社会への情報発信に努めています。

以上、農学部の現状と活発な活動の一端をご紹介させていただきました。農学部のホームページをご覧ください。最近の出来事、各研究室の研究成果、各学科の教育研究の状況など、「農学部の今」がわかる様々な情報をご覧いただけます。ぜひ時々、農学部のホームページ（<http://www.agr.niigata-u.ac.jp>）を）覧いただきたいと思ひます。

末筆ではございますが、同窓生の皆様のご健勝と益々のご活躍を祈念申し上げますとともに、今後とも農学部への変らぬご厚情とご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

農学部を去るにあたって

ありがとうございます

ございました

大坪 研一

(応用生物化学科)



本年3月末をもちまして、新潟大学農学部を定年退職させていただきます。8年間という短い間で、農学部同窓会の皆様、教職員の皆様、そして学生諸君にも、大変お世話になりました。

農水省北陸農業試験場勤務の3年間を加えて、合計11年間を過ごさせていただきました。私にとりまして、新潟は、まさに「第二の故郷」となりました。東日本大震災の余波で茨城の茅屋も被災し、幸か不幸か、新潟市に自宅を構えることになっておりまして、これからでもできるだけ長く過ごさせていたきたいと願っております。四季折々の季節ごとの美しさの中で、海の幸、山の幸を味わうことができ、淡麗辛口の日本酒も楽しませていただいております。農学部の校舎から眺める、佐渡に沈む夕日のすばらしさはたとえようありません。毎年、卒業式に進藤会長先生のお言葉を伺うのが楽しみで、多く

のことを学ばせていただきました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。農学部同窓会の皆様のますますのご多幸とご健康とをお祈り申し上げます。私の退職のご挨拶とさせていただきます。

川 邊 洋

(生産環境科学科)



平成14年1月4日、大雪の日

に赴任して以来、14年が経過しました。これまで三大学に勤務してまいりましたが、最後の新潟大学が最も長くなりました。

赴任してまず、所属した生産環境科学科の「教育」に対する熱意が並ではないことにカルチャーショックを受けました。正直、それまでは「教育」を「研究」の下に位置づけてきましたので、改めて「教育」について考える機会になりました。とは言え、新潟以前の長年の「教育」に対する考え方がずっと尾を引き、学科の教育方針の足を引っ張り続けてきたことをお詫びしなければなりません。

研究面では、「地震による崩壊」をテーマの一つにしてきました。この

14年間は、新潟県中越地震を始め、国内外で地震災害の多発した時期でした。災害が多発すると研究材料が蓄積されるという因果な研究分野で、災害に遭われた方には申し訳ないのですが、いろいろと考察を深めることができました。ただ、新潟に来るのを機会に、地震災害から離れようと思っていた願いは、儚く消えてしまいました。新潟大学農学部は、教職員間のつながりなどを考えると、適度な規模だと思えます。厳しい時代ですが、この規模を維持しつつ、さらに発展することを祈念しています。ありがとうございました。

大学とは？

小島 康夫

(応用生物化学科)



10年間の大学

生—大学院生の時代、さらに27年間の北大教員と8年間の新潟大学教員としての生活を送ってきた。振り返ってみれば、自分としても幸せであったことにただ感謝するばかりである。自由に生き、発言してきた45年間であった。大学時代の同期たちとは、ぶつかり合いながらも本音で語り合い、朝まで酒を飲んだ仲間だ。今でも毎年酒を酌み交わし、生涯の友となっている。大学の意義のひとつはこうした友を得ることでもある。

ことでもある。これまでの研究で世の役に立ってきたか？と問われれば心許ない限りであるが、それでも2000人近い卒業学生を世に送り出し、それなりに社会に役立っている教員も居る。学生の能力というものには優劣があることは当然であるが、その人間性においては優劣はなく、素直さが学生自身の将来を大きく成長させているようだ。

昨今、入試の在り方について論議されているが、大学の役割はどのような学生を入学させるのか、よりどのような学生を育て、社会に送り出すのか、が最重なる課題であることは今も昔も変わりはない。遅く素直な学生がこの新潟大学で育っていくことをこころより祈念する次第である。

農学部33年間で

振りかえって

星 野 力

(応用生物化学科)



私は、本学農芸化学科に昭和44年入学し48年に卒業した。その後名古屋大学大学院へ進学し、東京の他大学で助手を約7年間務め、農産製造学教室の小笠原長宏教授に助手として採用していただいた。当時でも大学で

教育・研究職に携われるのは非常に難しく母校に戻れたのは有難かった。しかし研究設備環境は貧弱で他大学等へサンプル測定をお願いして論文を少しずつまとめるといったことが続いた。長いこと微生物の青色色素ピオラセインの生合成研究を開することになった。生合成研究には、生物学（酵素）と有機化学の両面でのアプローチが必要である。競争相手がたぶんいないと思いつくりと進めることが出来ると考えたが、その考えは甘かった。最近では諸外国の多くの研究者がこの青色色素研究を報告するようになっていた。その後テキサスA&M大学化学科・生化学科に2年間留学する機会が得られ、研究の大きな転機となった。天然物化学領域での日本人の貢献度の大きさは、当時世界的に広く認知されていた。しかし、天然物は生物がつくる有機物質である以上、酵素化学的な面からの研究は必須であるが、その方面での研究例が乏しかった。留学先のボスは、ピタミンB12の生合成研究で世界をリードしており、遺伝子を積極的に取り入れて研究を展開されていた。現在の私の研究スタイルは、この留学に端を発しているといっても過言ではない。留学先では、酵母のラノステロール合

作用の実証に成功した。また、細菌由来のジテルペン合成酵素の機能解析や興味深い生物活性も新たに見出すことができた。今は植物由来のトリテルペンβ-アミリン合成酵素の触媒機構解明に取り組んでいる。また、微生物色素の生合成遺伝子クラスターも取得し、生合成経路の重要な酸化機構について新しい知見を得た。現在は、ゲノム情報から攻めるというゲノムマイニングが当たり前の時代になった。すさまじい学問の進歩を感じる。その間、非常に多くの学生諸君が、遺伝子・酵素学・機器分析（構造決定）や基質の化学合成などに携わり、多彩なアプローチを駆使して研究を展開していた。これも、農産製造学・生物有機化学研究室の卒業生の努力の賜物と感謝している。また、NMR機器が農学部設置されたことも研究の大きな進展となった。これは、応用生物化学科をはじめ農学部教職員のご協力のおかげで導入できたと感謝している。

振り返ると若いころの思い出がよみがえる。小笠原先生や内山先生らと一緒に山梨へのワイン旅行、デルモンテへの工場見学や恒例のバーベキュー宴会での大先輩との交流などを通じて教えてもらったことが多々ある。当時は、大学ものんびりとした雰囲気であることが進められていた。遠い過去のような気もする。現在のようには忙しくはなかった。大学も10年も経つと価値観が大きく変化してきたように思う。がむしゃらにやっていた、気がついたら定年の年となっていた。無事に定年退職できる

ことに嬉しく思っている。これも農学部教職員や研究室でともに実験を行った学生諸君の支えがあつたことと心より感謝している。最後に

2015年度活動計画

幹事長 箕口秀夫

農学部への更なる発展を祈念して感謝の言葉とします。有難うございました。

- 1、松濤 33号の発刊
より充実した内容を企画して読まれる会誌を目指します。
- 2、同窓会ホームページの充実
充実した魅力ある情報をお届けできるように更新に務めるとともに、学部同窓会関連の集会等の開催案内を掲載します。
- 3、支部活動の支援
各支部の活動をより一層支援します。例えば、支部主催の研修会への講師派遣等について。
- 4、『嵐丘庭』の維持・管理、有効活用
本会60周年記念事業で造成され、農学部顔となつた「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部への帰属意識を醸成します。
- 5、学内諸行事への支援
「卒業祝賀会」を支援します。また、退職教員に記念品の贈呈を行います。
- 6、学術・文化活動への支援
農学部や各学科が行う学術・文化活動を支援します。
- 7、受験者増加への取組みに対する支援
受験者確保のための「高等学校での説明会」及び「高等学校での出前講義」に行くための旅費の支援を行います。
- 8、農学部在学生のための農学部図書室の充実支援
学生の保護者から同窓会活動を理解してもらうための具体的な支援を行います。
- 9、農学部学生の就業力育成に係る支援
農学部学生の就職活動にあたり、卒業生（先輩）による指導、助言のための研修会への支援を行います。
- 10、全学同窓会への協力
運営委員会への参加、カード入会事業の協力、大学との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

支部だより

◆北海道支部

本年度第十九回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会の総会は、十月二十四日（土）に、空知管内長沼町にある「ながめ温泉」にて、源泉かけ流しの天然温泉と静かな環境の中で開催となりました。翌日は、道央でも初雪となりました。

開催案内は毎回九十通ほど出していますが、当日、他の用務がある方も多く、総会出席者は九名でした。出席できない方からもハガキやメールなどで近況報告があり、総会で紹介しています。ここ数年、参加人数が減少傾向で、今後も更なる参



加の呼びかけが必要となつていきます。

総会では、明

田川会長（昭和

四十五年農工）の挨拶の後、平成二十七年度経過・会計報告、五十嵐副会長（昭五十一農学）が出席された新潟市での同窓会常任幹事会報告、平成二十八年度事業・予算案について協議し、それぞれ承認されました。

総会に続く懇親会では、紺谷顧問（昭三十三農学）による乾杯の挨拶のあと、近況報告等を行い、二時間余り語り合いました。その後、二次会では、留萌産海産物の珍味をつまみながら、新潟の銘酒を飲み比べ、夜十時過ぎ、盛会のうちに終了しました。

翌日の朝は、少し疲れが残っていましたが、温泉で疲れを癒し、それぞれ帰途につきました。

同窓会も次回が第二十回目となります。次回の同窓会は、平成二十八年秋頃、道央方面で開催することとしました。会員の皆様、どうぞ気軽にご出席の程、宜しくお願い致します。

佐藤 誠一（昭60農化）

◆秋田県支部

秋田県支部の総会は、6月27日（土）に秋田キャッスルホテルで18人の出席のもとに開催しました。小島武志会長（昭52卒）の挨拶のあと、事務局から平成26年度の事業実績及び平成27年度の事業計画が報告さ



れ、それぞれ承認されました。引き続き行われた懇親会では、佐藤誠洋副会長（昭58卒）から新潟で開催された常任幹事会の様子が報告され、その後は恒例の全出席者からの近況報告に移りました。最後の方が話し終わる頃には、飲み放題の持ち時間も残りわずかで、あつという間にお開きとなりました。また、忘年会は12月5日（土）に秋田市大町の居酒屋で開催し、今年の行事を締めくくりました。

秋田での大きなイベントは、秋田市で5月30（土）、31日（日）に開催された「東北六魂祭2015秋田」でした。東北六魂祭は、東日本大震災の犠牲者を悼み復興を願う目的で始まった大型イベントで、東北6県を代表する夏祭りが集結しパレードするものです。2011年7月の仙

台市から始まり今回が5回目秋田では初開催。会場の秋田市山王大通りでは、秋田竿燈まつり、盛岡さんさ踊り、山形花笠まつり、仙台七夕まつり、福島わらじまつり、青森ねぶた祭が共演し、会場を埋め尽くした観客（2日計26万人）を魅了しました。私もこの二日間、交通整理員として参加する中で、各県の祭りの集結に復興への力強さを感じたところでした。

ちょうどこの松涛が発行される3月で、東日本大震災から丸5年となります。被災地ではいまだ仮設住宅で暮らす人、また避難生活を送る人も多いようです。東北が一つとなつて復興を支援し、震災の記憶を風化させてはならないことを改めて認識した機会になったと思います。

鈴木 善彦（平3農）

◆福島県支部

今年も、福島第一原発事故など震災復興、廃炉への作業が、試行錯誤の中で続いております。

この状況の中、7月11日（土）、郡山ビューホテルに於いて、母校、新潟大学から新村末雄先生をお迎えして、二年ぶりに、福島県同窓会が開催されました。

会長挨拶では、母校から、新村末雄先生をお迎えして、大学の最近の様子をお伝えして戴くこと。先生の教え子も多数参加して、先生のお話を懐かしくお聞きすることが出来る喜びについて述べました。

次いで、事務局長の沢田吉男さん

から、福島支部の活動状況と、母校の新村末雄先生のご紹介がありました。

続いて、新村先生から、新潟大学の最近の様子を、資料を使われて、ご講話を戴きました。

内容には、卓越した研究拠点と高度な教育体制の中での新潟大学の様子であり、驚きの中での講話でありました。中でも、学生の諸君から、大学の先生の講座を評価される段には、元高校教師からすると、頭を抱えてしまう思いがいたしました。そして、ひと時、古き良き時代の学生生活に戻ることができ、河渡のキャンパスが、懐かしい思い出とともに、目に浮かびました。

そして、懇親会では、今回には、参加者27名の出席が見られ、中でも、新村先生の教え子、女子4名の方々が、福島県同窓会に華を添えて戴き

ました。

新村先生のお席には、多くの教え子の皆さんが、「学生時代の思い出ばなし」をみやげに、大いに盛り上がりを見せておりました。先生も、こよなく楽しい思いの中で、お過ごしになられました。

引き続き、二次会。先生を含めて、多くの皆さんの参加を得て、盛大に開かれました。学生時代の思い出をはじめ、世の中の出来事、職場での問題点、ご家族の様子など、心ゆくまで歓談の輪が広がられました。

次回もまた集う人々への想いを胸に、支部活動の一層の高まりを祈念しながら支部総会を閉会しました。

高久 英昭（昭32農）

◆首都圏支部

6月6日（土）13時から、東銀座の歌舞伎座近くの「ラウンジ日比谷」で、首都圏支部の総会を開催しました。今年は進藤会長が4年ぶりに出席されるということで、同世代の同窓生を含めて大勢集まってほしかったんですが、思うようには出席して頂けませんでした。来賓を含めて23名の出席でした。進藤会長は挨拶の中で、今まで本部同窓会と同窓会支部の交流会がなかったもので、まず会長自ら首都圏支部に出席して先鞭をつけて、来年以降も会長が支部の総会に出席をする方針であること、又2期8年会長を務めてきたので、来年は総会を開催して後任に道を譲り、役員体制を入れ替えたいという



お話でした。総会で、事業報告、会計報告、監査報告が承認されました。役員体制は、横山耕治幹事（S47年卒）が退任され、新しく八木敬広さん（H14年卒）が幹事に加わりました。これで池田さん（H13年卒）と八木さんの2名の平成卒の幹事が誕生しました。これからも若返りを図っていきます。総会の後、門脇基二教授から、「米の新規機能性…ライスイノベーション」という演題で講演をして頂きました。米は私達の主食であり、エネルギー源として特に糖質（デンプン）を中心に研究されてきました。日本人は、1日に摂取するタンパク質の約12%を米やその加工品から摂取していますが、米タンパク質はほとんど研究されていませんでした。門脇先生は、米胚乳タ

ンパク質（RP）と米糠タンパク質（RBP）の多様な生理機能性について研究を進め、脂質代謝の改善作用、糖尿病への効果、消化管免疫に対する効果などの作用を見出したそうです。米タンパク質の新しい機能を生かした製品開発や米作の産業としての活性化が期待されます。講演後、活発な質疑がなされ、米タンパク質によって花粉症アレルギーが改善される可能性、米の品種によるタンパク質組成の相違、米タンパク質の精製法などの質問が出されました。各出席者は米に対する関心が高く、懇親会でも先生とコメに関する話題で議論が続きました。米の研究や米を使った産業に関わっている同窓生も大勢いると思いますので、是非、皆さんに参加をして、門脇先生の講演を聞いてほしいからです。講演内容に関心のある方は、首都圏支部事務局か、門脇先生に連絡をして下さい。講演の後で記念写真を撮り、懇親会に移りました。1年に一度集まって、お互いの近況を確かめたり、酒を酌み交わしながら、様々な話題で談笑をして楽しい時間を過ごしました。最後に若桑道夫さん（S35年卒）の音頭で全員で「四季の新潟」を合唱し、手締めで会を終りました。平成27年度首都圏支部年会費を納入して下さいました会員の皆様、有難うございました。更に、新潟大学首都圏同窓会が呼びかけた「新潟大学基金」に寄付をして下さいました同窓会員の方々にも感謝を申し上げます。

佐藤 純一（昭47農化）

◆新潟県支部

平成27年の支部活動としましては、1月31日（土）にANAクラウンプラザホテルにおいて第4回新潟県支部総会を開催しました。当日は悪天候にもかかわらず74名の方々から出席をいただきました。総会では、進藤同窓会長の御挨拶のあと幹事長の箕口先生による農学部近況報告がありました。懇親会では、出席者最長老の若林さん（S29、第2回卒）の乾杯でスタートし、懐かしい思い出話に花が咲き、農学部学生歌も熱唱されました。最後の締めは出席者最年少の遠藤さん（H17、第53回卒）が一本締めを行って散会となりましたが、半世紀以上の年代の開きがある中で、それぞれの時代や伝統について話を交わす非常に素晴らしい機会となりました。

また、私自身は支部代表幹事として、5月30日（土）の農学部同窓会の常任幹事会にも出席しました。他県の支部代表者も出席されており、懐かしい思い出を語り合うことが出来ました。さらに、10月24日（土）の新潟大学全学同窓会設立10周年記念行事にも参加し、小泉武夫先生の「発酵食品の神秘」という演題の大変面白い講演も聞くことが出来ました。私は、以前2週間のブラジル研修に行った時に、生水を飲んで食あたりを起こしたことがありましたが、食あたりの予防策として納豆が良いとの話がありました。先生は海外に行く時は、常に乾燥粉末納豆を持参し、これを食べることによって



一度も食あたりはなかったそうなので、海外旅行時などにはぜひ実践してみようと思いました。

支部長を引受けてから2年が経過しました。お世話になった農学部に何とか現職のうちに恩返しがしたいと思っておりましたが、これといった貢献も出来ないまま時間だけが経過したように思います。早いもので、私も定年を迎えますので、支部長も現職の若手にバタタッチし、新潟大学農学部同窓会の益々の発展を今後一会員として応援してまいりたいと思います。

白井 敏彦（昭55農）

◆長野県支部

今年の長野の夏は盆までは酷暑が続いていましたが盆明け後は残暑と言える程の暑さも無く時折適度な雨

もあつてか、秋の味覚松茸他雑キノコもシーズン早めから取れ始め菌類は久々の豊作の年でもありました。長野県支部第十九回総会は全国的に秋晴れが続いた爽やかな十月二十四日、長野駅前長野第一ホテルで九名の出席者を迎えて開催されました。今年は昨年に比べ出席者はやや少なめでしたが全員常連と云う事もあって和気あいあいの会となりました。

当支部長自信作のりんご王林を皆で食しながら、当支部の活動報告、本部同窓会常任幹事会報告、二七年度会計報告と来年度の新役員が決定されました。当初の計画では先輩の講演も予定されていましたが急きよ都合がつかず今回は残念ながら取りやめとなつてしまいました。総会ではいつもアカデミックな講演が組まれており新大農学部らしい雰囲気を感じさせる会となっております。

来年度は当支部も第二十回の節目を迎え、次回は特別な記念行事も加え九月十七日（土）に松本で開催する事になりました。この記念総会をより多くの参加者で祝う事ができま

す様心待ちしています。毎回もう少し参加者が増えないものかと議題によく上がります。事務局から開催通知を郵送しても返信されない方が多い様です。松涛で他支部報告を拝見するに参加者も多く盛大に催されている様子、羨ましい限りです。

長野は縦に長く参加者の都合も考えて長野と松本で隔年交互に開催しています。たまにはゆつくりと温泉地で一泊の会も良いのではとの意見



も出ています。

会の締めは通常六花寮々歌他学生歌を歌って終わる手順ですが今回は会場の指定時間が迫り場所を移しての盛大なカラオケ大会で大いに発散した後閉会となりました。

春原 功治（昭49農工）

◆富山県支部

富山県支部は、平成28年2月5日（金）46名の会員が出席して、平成27年度支部総会・懇親会が盛大に開催されました。

総会では、林支部長のあいさつの後、平成27年度活動報告・会計報告が行われ、それぞれ承認されました。役員改選では、平成22年度から富



「伝統」の合唱

山県支部長を務めていただいた林靖太（S42卒）氏が退任され、中島清信（S47卒）氏にバトンタッチされました。林前支部長には支部活動に多大な貢献をいただき、会員一同心より御礼申し上げます。今後も支部顧問として指導、助言をいただきたいと存じます。

また、相談役として、平成27年4月に富山県議会議員に初当選した井上孝（S56卒）氏が就任され、既に相談役として活躍していただいている小林米和（S39卒）氏、富山県議会議員（当選5回）中川忠昭（S47卒）氏と厚みの増した役員体制が構築されたと思っております。



所属長森松亮（S54卒）氏による新入会員紹介
左：森松氏、中央：大西君、右：目黒君

ただくなど、例年にも増して大いに盛り上がりました。

総会・懇親会の最後は、「農学部学生歌」「四季の新潟」を出席者全員で合唱するのが恒例となっており、先輩方に先導していただきながら、若い世代の者がついて行く状態ではありましたが、皆、声高らかに合唱していました。

私の経験を言わせていただきますと、農学部運動会で「農学部学生歌」を聞いたことはありましたが、「四季の新潟」については、耳にしたことがなく、総会・懇親会に参加して、その存在を知りました。当初、総会・懇親会出席者での合唱は、単に「恒例のイベント」として受け止めていたのですが、最近では、「新潟県でなく、富山県において、皆で合唱することにより、新潟大学農学部卒であることを再認識し、支部の結束力の強化に繋がるのではないか」と考

えるようになり、この「伝統」は今後も継続していくことが大切ではないかと考えています。

今後も富山県在住の会員各位が大勢参加していただけるよう活動を盛り上げていきたいと考えています。

渡辺 大輔（平9生環）

◆ 福井県支部

福井県支部では、平成27年11月11日（水）に福井市内で総会と恒例の懇親会を行いました。昨年は週末に開催日を設定したところ、参加できる方が思いのほか少なく、お詫びの意味も込めて再び週の真ん中にしてみました。参加メンバーは入れ替わりましたが、結局人数は同じくらいでした。難しいものです。中でも、今年から会長に就任してくださった日下会長が急きょ体調を崩され、ご欠席されたのが残念でした。駆けつけてくださった同窓生は「心配だね」と言い合いながらも、結局いつも通り盛り上がりつつありました。お早い回復をお祈りいたします。

さて、山口良二事務局長より挨拶と会計報告をしていただき、そくさと写真撮影をして懇親会に移りました。懇親会では、各自の近況を自己紹介を交えて順番に語ります。毎年、この内容を考えるのが本当に大変です。今年の私の持ちネタは、「散弾銃取得」でした。福井は本当に獣害がひどくて、農作物が食い荒らされるだけでなく、山の植生までダメージを受けています。普及指導員として巡回指導をしていると、絶句



するような光景に出くわすことがあります。何とか状況を変えたくて銃猟免許と散弾銃の所持許可を取りました。猟師頑張ります。

熱燗が飛ぶように消費される中、在学中に住んでいたアパートの話や、通った定食屋さんの話など、懐かしい空間を楽しむことができました。悲しいことに、お店の名前をなかなか思い出せなくなっていました。

去年、料理を豪華絢爛にした話を書きましたが、今年は参加者急増を祈念して普通に返してしまいました。あんまり省エネが過ぎると、せっかくの支部活動費が活かしきれません。これをご覧の福井県支部の皆様、来年はついウツカリやり過ぎますので、奮ってご参加ください。

明間 基生（平5畜産）

職場紹介

日本ハム惣菜株式会社

山 田 杏 (平25農生)

【会社概要】

日本ハム惣菜株式会社は、平成4年に設立されたニッポンハムグループのグループ会社であり、ニッポンハムブランドの加工食品（ハンバーグ、豚カツ、から揚げ、焼売など）を製造しております。北は北海道から南は宮崎まで全国4箇所に拠点があり、それぞれの拠点にて地域に根ざした個性豊かな商品の開発・製造をしております。

○事業所

- ・北海道工場
(北海道江別市)
- ・新潟工場
(新潟県三条市)
- ・宮崎工場
(宮崎県日向市)
- ※一部東京駐在
(東京都品川区)



【当社が目指すもの】

当社企業理念において「食べる喜び」を基本のテーマとし、地域に密着し継続的に成長し続ける企業を目指します。商品の品質を徹底的に磨き、お客様に選ばれ続けるための努力を惜しまないとともに、環境の変化に対応し食の新たな可能性を切り開くことで継続的な成長を実現することが目標です。

【チキチキボン】

当社の看板商品は何と言っても《チキチキボン》です。こちらは一口サイズの骨付きフライドチキンで、発売から25年以上もヒットしているロングセラー商品です。発売以来変わらない製法で作られ、長年お客様に愛され続けております。十種類のスパイスを使ったオリジナルの味付けをした衣をつけてスパイシー＆ジューシーに仕上げたのであるので一度食べればまた食べたくなる味です。他にもお弁当用の冷凍食品から業務用のお惣菜まで様々な商品をつくり続けております。



【業務紹介と商品ができるまで】

当社にある部署は商品開発課、品質保証課、製造課、生産管理課、技術管理課、総務課、管理部です。中でも卒業生が多く在籍し、花形部署である商品開発課の業務内容を紹介いたします。業務の流れは大きく三つに分けられます。①マーケティング・企画、②試作・原価試算、③ライン導入・販売。

まず①のマーケティング・企画では、お客様が求めている商品は何か、コンセプトは何かを決定します。②の試作・原価試算では決定した商品を実現するための配合や製造設計、製造にかかるコストの計算をすることで、求められる品位と会社の利益を両立させます。最後に③ライン導入・販売では大量生産できるよう、今までのマイクロサイズでの検証からマクロサイズへの検証へスケールアップして問題点を抽出していきます。こうした流れを経て、お客様の元へ商品をお届けしております。



(写真：北海道工場)

【地域貢献活動】

当工場では、コンプライアンス活動の一環として、五十嵐川・工場周辺のクリーン作戦を実施しています。工場の従業員だけではなく、従業員の家族も参加して、ゴミ拾い活動を行っております。また、近隣住民の方からの意見や要望を聞くために地域懇談会（環境対策報告会）を毎年実施しております。その他、従業員の交通安全への意識を高めるために警察署交通課の方を講師に迎えた交通安全講話の受講や、飲酒運転根絶を目的とした社内教育等、交通ルールの順守・安全運転の徹底を繰り返し周知しています。これからの地域に貢献できるよう、様々な活動に取り組んで参ります。

【卒社の誇り】

当社では『品質・食品安全・環境・安全』の4つの柱を企業活動の基本と考え取り組んでいます。そのため、マネジメントシステムの国際規格であるISO9001（品質マネジメントシステム）、ISO14001（環境マネジメントシステム）、OHSAS18001（労働安全衛生マネジメントシステム）、FSSC22000/ISO22000（食品安全マネジメントシステム）を全事業所で認証取得し、有効に活用するためにシステムのメンテナンスや従業員教育の機会を多く設けています。

これらの地道な活動が商品の安全・従業員の幸せにつながるという信念は誰にも負けません。

【当社の新潟大学農学部出身者】

当社の従業員755名（正社員186名）のうち、新潟大学農学部出身者は5名在籍しております。（農生4名、応生1名）

現在の配属先は、北海道工場1名、新潟工場3名、宮崎工場1名となっております。全国各地で活躍しております。

商品開発課、品質保証課、管理部…とそれぞれ部署は違いますが、おいしさの感動と健康の喜びを提供するため日々業務に精進しております。



(写真：上 新潟工場、下 宮崎工場)

同窓生からのたより

公園での仕事

高澤 理子（平22生環）

① 現在の仕事

現在私は、新潟県立鳥屋野潟公園（女池・鐘木地区）の指定管理業務を受託している企業でパークコーディネーターとして働いています。主な業務は来園者の対応と、公園で行われるイベントの企画・運営です。一口に来園者の対応といっても内容は様々で、迷子や落し物だけでなく、車のバッテリー上がりや木にひっかかってしまった風の救出、インコの拾得など色々なことが起こります。最近では「どんぐり係」として秋のイベント用にマテバシイ八百個に一つ一つ顔を描くのが恒例となっています。

② 熱中していること

最近熱中しているのは「ダムカード」を集めることです。ダムカードとは、ダムで配布されているカード型のパンフレットのことで、旅行や帰省を利用して各地のダムを訪れ、少しずつ集めています。最近山形県長井市にある木地山（きじやま）ダムへ行ったら



ですが、大変道が険しく苦労しました。情報サイトによればすれ違いが不可能な道が十キロも続くとのことで、覚悟をして臨んだものの、想像以上の道の険しさに挫折しそうになりました。そして何とも情けないことに、せっかく辿り着いたもののタッチの差で管理所が閉まってしまいカードは貰えずじまいでした。カードを貰うにはまたあの険しい山道を延々と運転しなければいけないのかと思うと、なかなか再訪する決心が付きません。

③ 最近感動したこと

職場で野鳥を観察する機会も多いのですが、昨年の冬生まれ初めてヒレンジャクを見ることが出来た時はとても感動しました。そんなに珍しい鳥ではないのですが、図鑑をめぐっているという手があるとまるほどの特徴ある外見の鳥です。私はまだまだ野鳥について勉強中であるため、園内で観察することが出来る鳥に限っても分からない鳥の方が多い位です。そんな私が図鑑を開かなくても一発で「ヒレンジャクだ!」と分かる程の色鮮やかさでした。新潟の冬は寒く外に出るのが億劫な時もありますが、またヒレンジャクに出会えるのではないかとと思うと足取りも軽くなります。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへ

私の職場は新潟市の中心部に位置してはいませんが、自然が多く残されておられる多くの動植物に出会うことが出来ます。同窓生の皆様、是非大学で学んだことを思い出しながらの散

策にお越しく下さい。学生の皆様、実習や研究では是非公園をご利用下さい。お待ちしております。

⑤ 今回の執筆者のご紹介

研究室の先輩であり、夫である高澤忠司さんにお願いしました。よろしくお願ひします。

新潟時代から20年、不惑の歳を目前に

塚田 真一郎（平11生環）

① 近況報告

平成12年度に修士課程を修了後、生研機構（旧独法）での勤務を経て地元へ戻り岐阜県庁に入庁。岐阜県は面積が7番目に広く道路が整備途上のため13年で引越5回の県内転勤族として、各地の地域性を確かめつつ農村整備に携わっています。今回は庁舎内を軽いフットワークでお猿さんのように飛び回りテキパキ仕事をすると勝又さんにご紹介いただきましたので寄稿いたします。



私は、学生時代は農業機械を専攻し農業機械実験棟の設備や村松農場の大型農業機械を使ったり試験ができたという貴重な機会をいただきましたが、実は、農業土木は基礎

的な講義の聴講にとどまったため、入庁当初は戸惑うことも多く、新潟大学の充実した農業土木をよく学んでこなかったことに若干悔いを覚えつつも、昨年度は農業農村工学会京都支部会で講演発表するなど、30代後半にして農業土木技師らしくなってきたいました。学部3年次から修士課程までお世話になった鈴木正壯教授に研究の方法論を徹底して教えていただいたことで、調査手法や学術論文の書き方等は仕事で活用されるものも多く、新潟大学で学ぶ機会を得たことに感謝しております。

② 趣味、または熱中していること

一眼レフカメラを楽しんでいます。まさに新潟で学生時代の頃、撮影画素数の比較的多いデジカメが登場し、研究はもとより所属したアーチェリー部の試合風景等を撮影していました。周知のように20年で性能は飛躍的に向上。特に最近5年でデジタル一眼レフは性能が一定水準に達した感があり、移りゆく景色の瞬間を巧みに映像で切り取るという難しいですが真剣勝負にも似た感覚を楽しんでいます。

③ 最近、感動したこと

今年の夏、同窓会のため久しぶりに新潟へ参りましたが、新潟駅界隈の繁忙と古町の閑散ぶり、佐渡演習林へ行くために何度も乗船した「おおさど丸」の退役等、街の変容ぶりに驚きました。また、アーチェリー部顧問をされ練習で手ほどきも受けた畜産の河野健太郎先生が高齢ながら健在でいらつしやるの話を伺ったこと。新潟駅南でよく食事をした「ひさご」のおばちゃんが（休業前の話ですが）顔を覚えてくだ

さっていたことに感動しました。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへ のご意見、ご提言

北陸新幹線の開通により長野発直江津行きの列車が減少、20年前の学生時代に開通した北越急行線は早くもローカル運行主体に移行し、今後の新潟行きは高速バスか新幹線利用になりそうです。東海地区ではリニア中央新幹線が現実味を帯びるなど、今後は中山間の田舎も少なからず影響を受ける時代となり得ます。なかなか難しいことですが、地に足を付けながらも、国内情勢はもとより、より国際的な視点で農業現場にどのような影響が生じるのか学生時代から思いを巡らせて思考する訓練をしたり、今に至る経緯や歴史(技術史等)を学ぶことができる教育環境が必要ではないかと感じております。

最後になりますが、40歳の節目を迎える直前に同窓会誌への寄稿という学生時代を振り返るよい機会をいただいたことに感謝しております。

⑤ 次回に執筆して頂く同窓生の紹介

同期で農業システム工学研ラクロスのカリスマこと梅田(鈴木)裕美さんをお願いします。



思 い

加藤 仁(昭52農)



① 近況報告

昨年、三十六年間勤めた県庁を退職し、今は再任用職員として新発田地域で花き産業発展に向け、新たな気持ちで働いています。

毎日列車で通勤していますが、車窓から眺める景色から四季が感じられ、心安らぐひとときとなります。春には若葉、夏には水田風景、秋には朝もやと黄金に輝く稲穂、冬には遠く山の冠雪など車窓がキャンパスになります。

② 趣味または熱中していること

昨年の十一月に待望の孫が誕生しました。嫁いだ娘の初めての子供で、我が家に里帰りして出産し、育児をしています。孫はみるみる成長し、いろいろな仕草や表情を見せてくれます。それを記録に残しておこうとビデオやデジカメで撮影ばかりしています。また、毎日一回はだっこをしないと気が済まないほどかわいくてたまりません。この「松涛」が発行される頃には、娘と孫は自宅に帰っていることと思いますが、記録した短期間の成長を振り返っていることでしよう。

③ 最近感動したこと

やはり孫の誕生には久しぶりに何ともいえない感動を味わいました。自分の子供の時は出産には立ち会わなかったのですが、今回はカーテン

越し(声のみ)に誕生の瞬間を経験しました。出産直後の赤ちゃんの元気な鳴き声と娘の出産という大仕事をやり遂げた安堵の顔を見て、初めて「おじいちゃん」になったんだと感激しました。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへ のお願い

健康が一番です。今、減量に挑戦しています。社会人になって十キロ増加した体重も二年間でほぼ学生時代の体重になりました。

何事も目標を持ってそれに向かつて行動すれば、叶うということを体験しました。皆さんも目標を掲げたその目標を実現するためには何をしなければならぬかを常に考え、諦めずに行動することをお勧めします。

⑤ 次回に執筆して頂く同窓生の紹介

新発田地域で農業振興の主導的役割を担い、日夜奮闘されている土田豊樹さんをお願いします。

農化発、私の職業人生

今井 尋美(昭58農化)



私は大学卒業後、当時所属教室の製薬会社に就職しました。入社当時は品質管理部門で白衣を着て試験管を手に入っていたものの、後には新薬の開発に携わることとなり、大学病院の医師を訪ねて臨床治験データを回収し厚生省へ

の申請資料を作成するという、一転して営業&事務色の濃い仕事に変わっていききました。その後地元に戻ってきてからは医療関連業務受託の仕事に携わり現在に至っています。が、かつて製薬会社時代の病院訪問の経験がとても役立っています。農学部卒としては当初全く予期しなかった道を歩んでいる気もしますが、振り返ってみると、農化卒↓製薬会社↓病院関係↓現在の仕事と道は繋がっており、そのおかげで今充実した人生を送れているのは幸せなことです。

大学で専門知識を学び就職した若い頃は、誰もがとかく「自分のやりたい仕事と違う」「学んだことが活かせない」「自分には向いていない」と悩みますが、『人生は何がきっかけで、どう道が開けていくかわからない。だから面白い』とも言えます。ですから後輩の皆さんには是非伝えたいのは『長い人生いろいろな経験し、決めつけず柔軟に生きて欲しい。置かれた環境から逃げずにまずは挑戦すること、知らなかった自分を発見できる喜びもある』ということです。

こんな私ですが、今プライベートではクサガメの飼育に熱中しています。というのも、十年来飼っている雌雄ペアに昨年子亀が五匹誕生しました。昨年は春に息子が就職上京し、夏にはペットの犬が亡くなり寂しい限りでしたので、九月の子亀誕生は感動的でした。今まさに育ち盛りのかわいい子達です。親バカ返上、亀バカになってのめり込んでいる毎日です。大事に育ててあげたいと思っています。

少し大人になりました

藤 井 崇 (平14農生)



① 近況報告

農学部を卒業後、新潟県に採用されました。初任地は糸魚川で畜産の普及担当として3年間勤務し、その後、三条市内にある農業総合研究所畜産研究センターに異動し、県職員としては長いといわれますが、同じ職場に勤務して9年が過ぎようとしています。現在は豚の研究員として、政策として推進されている飼料用米の生産・利用の拡大にともなう飼料用米の利用に関する研究を主なテーマに、また畜産業では解決困難な課題である臭気問題についても調査・研究をおこなっており、いろいろな苦労はありますが、充実した日々を過ごしています。

② 趣味または熱中していること

大学時代よりモータースポーツに興味として休日のほとんどを過ごしていました。ここ数年の間に結婚、妻の出産、マイホームの購入と人生の転機が訪れ、時間的にも金銭的にも厳しいものとなり、愛車だったRX-7を一昨年に手放してしまいました。現在は子育ての合間に、畜産研究センターでの畜舎の修繕、改良で培った腕を活かして、自宅より楽しく過ごするための日曜大工に勤しんでいます。

③ 最近感動したこと

息子の日々の成長です。2歳を過

ぎ、新しい言葉を次々に覚え、話す言葉は単語から文章に、またいつのまにか歌を歌い始めました。感動の毎日です。

④ 大学、同窓会、学生のみなさんへお願い、アピールなど

私が勤務している畜産研究センターでは県独自の研究のほかに、大学や民間企業との共同研究も積極的におこなっています。なにかありましたら、ぜひ声を掛けてください。またこちらからお願ひする際は同窓のよしみとして協力いただけたら幸いです。

第19回生同期会の開催

19回生(昭和46年3月卒)の卒業45周年として、9月17日に5学科合同の同期会を東映ホテルで行いました。参加者は44名で大いに盛り上がりしました。(田伏記)



平成27年9月17日 於 新潟東映ホテル

新潟大学佐渡演習林60周年記念を 開催致しました

記念式典実行委員長 本 間 航 介

新潟大学佐渡演習林(農学部附属フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション)は、昭和30年に開設され、本年60周年を迎えました。この間、地方の規模演習林ならではの困難な道のりがありましたが、それらを乗り越えてこれたのは、ひとえにこれまで演習林を利用して教育研究をしてこられた皆様のおかげです。

これまで当演習林に関係してこられた方々への感謝の意を込めて、10月3日(土)に60周年記念式典を開催させて頂きました。文部科学省・新潟県佐渡地域振興局・佐渡市・東京大学・九州大学などからも来席を頂き、盛会となりました。また、これまで演習林の維持管理に多大な貢献をされた元技術職員2名に感謝状・記念品を贈呈いたしました。

60年は人生では還暦ですが、日本で最も古い演習林に比べればまだ半分ほどのひよっこです。今後、皆様のご支援を演習林の力として、佐渡演習林教職員一同、演習林の更なる発展に



第21回農学部フォーラム／ 第6回新潟大学・刈羽村先端農業 バイオ研究センターフォーラムの報告

K A A B センター長
第21回農学部フォーラム実行委員会委員長

三ツ井 敏 明

2015年8月29日(土)に、農学部と新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センター(K A A B)との共催で、第21回農学部フォーラム／第6回K A A Bフォーラム(刈羽村後援)を開催しました。今回は、「新たな技術で拓く資源循環型作物生産の可能性」と題して、新潟大学中央図書館ライブラリーホールにて実施しました。フォーラム開催に先立ち、高橋姿学長および品田宏夫刈羽村村長からご挨拶があり、K A A Bと刈羽村の連携が引き続き推進されることが確認されました。講演会では、国立大学法人豊橋技術科学大学・先端農業・バイオリサーチセンター・特任教授の三枝正彦先生の基調講演「持続性の高い農業生産のための資源循環型養分管理」が行われました。お話は多岐にわたり、持続性の高い農業生産を推進するための資源循環型養分管理について、有機性廃棄物の有効活用、土壌診断に基づく適正

施肥と蓄積養分の再利用、工業的副産物の活用などを検討すると共に、新たに問題化している都市農業や施設園芸農業、農業のIT化、6次産業化などを含めた我が国農業の今後のあり方について述べられました。特に、土壌のメタボ化やコーティング肥料の話題は興味深く、また、6次産業化におけるしんきん(地域の信用金庫)の活用のお話は大変示唆に富むものでした。続いて、秋田県立大学生物資源科学部准教授の佐藤孝先生は「排水不良転換畑におけるモミガラ補助暗渠とマメ科緑肥によるダイズ多収技術」について講演されました。マメ科緑肥作物へアリーベッチの根粒菌スクリーニングから農業現場での実証試験まで着実な研究開発の進め方に多くの学ぶべきことがありました。また、新潟県農業総合研究所作物研究センター専門研究員の南雲芳文先生から「高窒素鶏ふんペレットによる水稻の化学肥料

全量代替」について紹介がありました。鶏ふんを含め有機性廃棄物の有効活用がかなりのスピードで進んでいることが大変印象的でした。それぞれの講演後にフロアーからも多数の質問があり、資源循環型作物生産に対する関心の高さが改めて浮き彫りになりました。最後に、渡邊農学部長から農学部フォーラムとK A A Bフォーラム共催の経緯を含め閉会のご挨拶がありました。今回、農学部・K A A Bジョイントフォーラムを開催することになった経緯は、末吉教授から提案されたK A A Bフォーラムテーマが農学部フォーラムに相応しいテーマであったこと、そして開催経費問題など諸般の事情から、急遽、農学部とK A A Bの両主催でフォーラムを開催することになったということです。

本フォーラムには、富山県立中央農業高校の生徒や刈羽村、十日町、長岡から参加された方々を含め多数の参加者がありました。なごやかな雰囲気でありつつ、濃密な議論が行われ、大変有意義な講演会となりました。ご協力、ご参加くださった皆様に心から感謝申し上げます。また、フォーラムの開催にあたりまして農学部同窓会からもご支援いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。



佐藤 孝先生



三枝 正彦先生



品田 宏夫
刈羽村・村長



高橋 姿 新潟大学学長



南雲芳文 先生



農学部における国際交流について

農学部国際交流委員会委員長 末 吉 邦

平成27年度における農学部の国際交流の主な動きをご報告いたします。

まず、大きな出来事は、平成27年7月19日～22日に第5回農学部国際シンポジウム「農業におけるグリーンテクノロジー」を開催したことです。このシンポジウムは、農学部主催のもと、海外の交流協定校から代表を招聘する形で2～3年ごとに開催するものです。シンポジウムでは、毎回テーマを設定し、アジア地域での食料生産と環境保全に関する最新の話題を提供しあい、アジア規模での資源と環境問題への今後の展望を議論します。学生に対しては、国際的な視野から農業に

関わる現況、今後の課題および対応策を把握させるねらいがあります。今回は、タイ・チェンマイ大学農学部を現地主催者として開催し、交流協定校である寧夏大学（中国）、カセサート大学（タイ）、タイグエン大学（ベ



第5回農学部国際シンポジウム
（平成27年7月、タイ・チェンマイ市）

トナム）、モンゴル生命科学大学、ブトラマレーシア大学から代表を招聘しました。参加者は総数約90名で、農学部からは学生30名、教員13名の計43名が参加し、学生は全員口頭あるいはポスターで自身の研究成果を英語で堂々と発表しました。なお、今回はブトラマレーシア大学で開催する予定です。本シンポジウムの開催にあたり、同窓会からも拠出したきました国際交流基金を活用いたしました。心より感謝申し上げます。

もう一つの大きなお知らせは、学術振興会の「大学の世界展開力強化事業」に採択されたことです。

この事業で、新潟大学は国内では福島大学と、海外ではトルコのアンカラ大学、エーゲ大学および中東工科大学と連携し、農業と防災・復興の教育研究で有するそれぞれの強みを生かし、防災を意識した農学人材養成を行います。統括センターを農学部におき、5年の事業期間で日本・トルコ間で学生を相互に短期から長期まで派遣します。

また、平成26年度から文科省の「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」にも採択されており、今年度はこのプログラムによる最初の国費留学生（博士後期課程）3名をロシアから受け入れました。

今年度も多くの来訪がありまして。5月3日にはアンカラ大学から



農学部留学生と指導教員との交歓会
（平成27年12月2日、新潟大学第一食堂）

Soyamezo 農学部長、他教員2名、学生2名が来学 Workshop を開催しました。8月3日には、本学主催の東北アジア農業農村経済セミナー出席に合わせ東北農学大学院の李

院長、張副院長、吉林大学刘教授、黒龍江八一農墾大学章副教授が来学しました。9月28日には、新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センター主催の国際シンポジウムに招聘されたスウェーデン農業大学 Mellerowicz 教授が農学部で大学紹介をされました。12月16日にはアンカラ大学農学部の H. Ercan 准教授が再来訪され、トルコの3大学の紹介をされました。

学生派遣の面では、ロシア沿海州農業アカデミーおよびチェンマイ大学のサマースクールにそれぞれ5名と7名の学生が10日間参加しました。平成28年1月5日～13日には、農と食のスペシャリスト養成プログラム・国際インターンシップで、大学院生17名をバンコクに派遣しました。さらに同年2月には、ブトラマレーシア大学で開催される世界農学学生会議に8名の学生を派遣する予定です。

平成27年12月2日には、恒例の農学部留学生と指導教員との交歓会を高橋姿学長をはじめ多数の来賓をお迎えし開催しました。留学生とご家族、留学生のお世話をしている日本人学生、指導教員など多くの方々に参加し、交流を深めました。参加された方々の国籍は、中国、ロシア、バングラデシュ、ベトナム、モリシヤス、スペインと多岐にわたり、改めて農学部の国際色の豊かさが再認識される会となりました。

2014年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告 (平成26年5月1日～平成27年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
基金収入からの繰入	4,200,000	4,200,000	0	
前年度繰越	584,128	584,128	0	
利子・雑収入	423	444	21	利息 444
合 計	4,784,551	4,784,572	21	

2. 支出の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	467,954	▲ 32,046	全学交流会参加補助、消耗品、通信費、謝金、首都圏支部出席費用等
2. 会議費	460,000	428,696	▲ 31,304	常任幹事会支部役員出席旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	54,000	▲ 6,000	名簿データメンテナンス
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	
5. 退職者記念品費	24,000	14,752	▲ 9,248	退職者 (教員1名)
6. 嵐丘庭維持費	100,000	145,206	▲ 45,206	前庭・中庭下刈り2回
7. 「松涛」発行費	1,300,000	1,203,811	▲ 96,189	「松涛32号」「しおり」印刷、郵送等
8. 慶弔費	50,000	0	▲ 50,000	弔電、生花等
9. 支部活動助成費	350,000	350,000	0	8支部(6支部35,000円、新潟県・首都圏支部各70,000円)
10. 学文活動助成費	250,000	94,766	▲ 155,234	新大G P (農学部主催)、農学部フォーラム
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,008	▲ 992	
12. ホームページ費	70,000	4,000	▲ 66,000	松涛32号、記事等掲載
13. 志願者確保対策助成費(出前講義旅費助成費)	270,000	165,812	▲ 104,188	教員による高校等への出前授業、アドミッションフォーラム等
14. 全国農学系学部長会議助成費	100,000	99,271	▲ 729	
15. 予備費	174,551	0	▲ 174,551	
合 計	4,784,551	4,103,276	▲ 681,275	

3. 差引残高 (A - B) 681,296円 次年度への繰越金

2015年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算 (平成27年5月1日～平成28年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	4,200,000	4,200,000	0	
前年度繰越	681,296	584,128	97,168	
利子・雑収入	444	444	0	
合 計	4,881,740	4,784,572	97,168	

2. 支出の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	550,000	467,954	82,046	役員会・通信・電話料・旅費・謝金等
2. 会議費	460,000	428,696	31,304	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	54,000	6,000	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	60,000	14,752	45,248	退職者4名
6. 嵐丘庭維持費	100,000	145,206	▲ 45,206	
7. 「松涛」発行費	1,300,000	1,203,811	96,189	「松涛」「しおり」印刷、発送等
8. 慶弔費	50,000	0	50,000	弔電、生花代等
9. 支部活動助成費	350,000	350,000	0	支部活動助成(6支部@35,000首都圏、新潟県@70,000)
10. 学文活動助成費	250,000	94,766	155,234	3大学合同研修会、F Cシンポ、新大G P、農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,008	992	分担金
12. ホームページ費	50,000	4,000	46,000	H Pメンテナンス等経費
13. 志願者確保対策助成費(出前講義旅費助成費)	270,000	165,812	104,188	高校訪問、アドミッションフォーラム等
全国農学系学部長会議助成費	0	99,271	▲ 99,271	幹事校として2014年度限りの諸経費への助成
14. 農学部図書室充実助成費	100,000	0	100,000	農学部学生用図書及び閲覧スペースの充実
15. 学生の就業力育成に係る助成費	50,000	0	50,000	農学部学生の就業力育成のため農学部卒業生による指導・助言
16. 予備費	155,740	0	155,740	
合 計	4,881,740	4,103,276	778,464	

2014年度新潟大学農学部同窓会 基金会計報告 (平成26年5月1日～平成27年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	前年度	今年度	増 減
繰越金	41,045,271	24,738,002	▲ 16,307,269
基金収入(入会金)	4,603,610	4,482,300	▲ 121,310
利子	32,359	30,038	▲ 2,321
60周年募金	3,407,720	9,870	▲ 3,397,850
60周年式典参加費	2,285,600	0	▲ 2,285,600
60周年式典祝儀	80,000	0	▲ 80,000
合 計	51,454,560	29,260,210	▲ 22,194,350

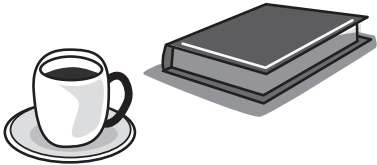
注) 利子の内訳は、右記のとおり

2. 支出の部 (円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	4,200,000	
合 計	4,200,000	

3. 次年度への繰越金 (円)

科 目	金 額
収入合計	29,260,210
支出合計	4,200,000
繰 越 金	25,060,210



学部だより

新任教員紹介

応用生物化学科

准教授 中井 博之



新潟大学
テニユア・トラク
事業「自立・競争
的環境で育てる
若手研究者育成

プログラム」を経て、平成二十七年四月一日付で農学部応用生物化学科准教授として着任いたしました中井博之です。

専門は糖質科学であり、我々の食や生活に有用な機能性糖質の製造技術開発および生理活性評価を行っております。近年、人口の高齢化や生活習慣病罹患率の増加により、国民自身の健康に対する関心が高まっております。食生活の改善を通じた健康管理の重要性が再認識される中、食品には栄養面や嗜好面だけではなく、生体調節機能が求められるようになってきております。糖質は生体調



節機能を有する代表的な食品素材であり、その種類を拡充し、現代社会へ供給可能とする実用的な製造技術の開発が求められております。平成二十二年十二月一日付でテニユア・トラク助教として赴任して以降、そのブレイクスルーとなり得る製造技術の開発に成功し、現在は様々な有用糖質の大量製造および機能性評価に取り組んでおります。

今後も本学の食品科学分野での教育・研究のより一層の発展に貢献していきたいと考えております。宜しくご指導の程お願い申し上げます。



農学部図書室に、農学部の学生が希望する参考図書を寄贈しました。この助成は自分たちの勉学に直ちに必要となる参考図書を身近において利用したいとの学生の希望で、学生の目線で選考してもらったものです。

「ファーストブック・統計学がわかる」「日本原色アブラムシ図鑑」「データマイニングの基礎」など31冊です。

農学部同窓会幹事長 箕口 秀夫（農学部教員 昭52年卒）

嵐丘庭（同窓会60周年記念事業で改めて造成し学部へ寄贈）を 活用した交流事業



先輩から引き継いだ、嵐丘庭の維持・管理作業をおし農学部での学びの日々を振り返ります。



農学部の動向

学会賞等受賞

- 藤村忍准教授（応用生物化学科）
日本畜産学会賞
- 門脇基二教授（応用生物化学科）
新潟日報文化賞・産業技術部門
- 甲斐慎一（平成24年卒・応用生物化学科）ヒューマンメタボロームテクノロジーズメタボロミクス先導研究助成奨励賞
- 佐藤努准教授（応用生物化学科）
第16回酵素応用シンポジウム研究奨励賞
- 上田大次郎（平成25年卒・応用生物化学科）
The Inaugural Symposium
Phytochemical Society of Asia
2015, The Best Poster
Presentation (Gold)
- 高橋秀行（平成10年卒・応用生物化学科）日本植物細胞分子生物学会奨励賞
- 大嶋美咲（平成26年卒・応用生物化学科）第59回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会ベストプレゼンテーション賞
- Marouane Baslam（助教・自然科学研究科（農学部）応用糖質科学会フレッシユシンポジウムポスター賞）
- 板谷越重人（平成27年修了・自然科学研究科生命・食料科学専攻）
北陸作物・育種学会賞奨励賞
- 種村竜太（平成3年卒・農芸化学科）第4回日本土壤肥料学会技術奨励賞
- 長坂克彦（昭和63年卒・農芸化学科）第4回日本土壤肥料学会技術奨励賞
- 渡部潤（平成14年卒・応用生物化学科）日本醸造学会奨励賞
- 粟生田忠雄・鈴木哲也教員（生産環境科学科）農業農村工学会教育賞
- 鈴木哲也・森井俊広・小林秀一・原斉（教員および卒業生・生産環境科学科）農業農村工学会優秀技術賞
- 中野和弘教授（生産環境科学科）
日本農業工学会フェロー
- 宮島伸子（平成27年修了・自然科学研究科環境科学専攻）第62回日本生態学会最優秀ポスター賞
- 大堀里奈（平成27年卒・生産環境科学科）第25回学生森林技術研究論文コンテスト日本森林技術協合理事長賞
- 谷口憲男技術専門職員（フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション）第17回全国大学演習林協議会森林管理技術賞および特別功労賞
- 崎尾均教授（フィールド科学教育

研究センター佐渡ステーション）
2015年植生学会賞

学会等の開催

○日本育種学会（平成27年9月11日）平成27年9月12日）日本育種学会第128回講演会、新潟大学五十嵐キャンパス、日本育種学会第128回講演会組織委員会委員長・岡崎桂一教授、農業生産科学科

○日本栄養・食糧学会（平成27年9月5日）第96回関東支部大会、新潟大学農学部、大会世話人・門脇基二教授、応用生物化学科

○日本災害食学会（平成27年7月18日）第3回研究発表会、大田区産業プラザ、会長・門脇基二教授、応用生物化学科

○農業情報学会（平成27年5月13日）平成27年5月14日）農業情報学会2015年度年次大会、東京大学農学部、大会委員長・中野和弘教授、生産環境科学科

学位取得

○大谷真広（平成24年修了）自然科学研究所／生命・食料科学専攻、博士（農学）平成27年3月

退職

当農学部及び新潟大学のため多大な貢献をされた先生方が平成28年3月に定年退職されます。

大坪 研一 教授（応用生物化学科）
川邊 洋 教授（生産環境科学科）
小島 康夫 教授（応用生物化学科）
星野 力 教授（応用生物化学科）
ご功績に心から感謝申し上げます。
ありがとうございます。

教員計報

緒形博之元教授（農業水利学）平成26年9月ご逝去。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員計報

金森亮太郎（昭23・3農専・林）
久保 吉平（昭25・3農専・林）
肥田 保久（昭29・3総農）
遠藤 貞夫（昭30・3総農）
近藤 信也（昭30・3農学）
進藤 長英（昭31・3林学）
田村 健一（昭31・3林学）
平松 勲（昭31・3農学）
池田 二郎（昭36・3林学）

渡辺 鉦吉（昭38・3農化）
佐藤 尚（昭42・3農化）
吉田 亮（昭43・3農工）
千田 秋広（昭44・3農工）
星 克久（昭44・3農工）
矢口 俊雄（昭44・3農学）
嘉部 博康（昭45・3農学）
土田 武夫（昭46・3畜産）
渡辺 光男（昭47・3農工）
浅妻 悟（平11・3応生）
立川 智之（平14・3応生）
（卒年次順・五十音順）
謹んでご冥福をお祈りいたします。

同窓会事務局からのお知らせ

住所《変更届》について

同窓会名簿の整備は、同窓会事業の根幹であり、運営の基となる貴重な資料です。
住所を変更された場合は、左記により農学部同窓会事務局までお知らせください。

住所変更の連絡方法

- ① 官制ハガキまたはFAX
025-263-3107
- ② E-mail：
dousou@agr.niigata-u.ac.jp

編集後記

昨年、新潟県の西の玄関口糸魚川市に勤務している。伊藤名誉教授の主宰する「流域交流ネットワーク」の縁で、十数年前に知り合った漁業者の方が地元漁業協同組合の役員をされており再会した。先生を、漁業者の方と能生にお招きして、地元の新鮮な魚と地酒を堪能しながら懇談をした。その際に、泊まった宿が、芭蕉ゆかりの宿で、これは、俳句を愛する恩師を是非お招きしたいと思い、師走、荒天の中、先輩とともに糸魚川を訪れて頂いた。その宿の玄関で恩師は、旧知の地元の方の句を見つけて感激をされていた。
新しい土地は、新たな出会い、数多くの発見がある。そして、再びの出会いや人間同士の不思議な縁もある。新潟大学農学部同窓のつながりは、人生の中でも大きいと感じる。
今年は、同窓会の総会も予定されている。是非、多くの方との再会と出会いを楽しみたい。
(H・W)



最近の農学部就職・進学動向

農学部就職専門委員会委員長 木南莉莉

農学部最近の就職状況は表1に示すとおりです。就職希望者の就職率は、最近ではほぼ99～100%となっており、全国平均を上回る非常に高いレベルということが出来ます。農学部卒業生が多く学ぶ大学院の自然科学研究科（博士前期課程）への進学率も高いものになっています。図1は、2014年度（2015年3月卒業）における農学部卒業生の進路状況を、百分率でまとめたものです。社会からの要請に対応する形で、大学院修士課程への進学率が高くなっており、約42%を占めています。そして製造業と卸小売業分野への就職割合が22%、農協などの複合サービス業が5%、国や県、市町村等の公務員への就職が14%となっています。図1に示した農学部の就職状況を3つの学科別にまとめると、図2のようになります。各学科の教育分野の特徴を反映して、就職・進学動向にも特色が出ています。

表1 最近の農学部および学内理学部・大学院の卒業生・修了生の就職率（%）

学 部	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
農 学 部	97.5	98.8	98.9	99.1	98.9
理 学 部	96.1	93.3	100.0	98.5	100.0
工 学 部	96.6	98.7	98.2	99.4	98.2
9学部平均	96.5	96.8	97.9	97.9	98.3
自然研（院）	96.5	97.1	93.8	98.0	98.7

（注）国公立大学の就職率の全国平均＝96.7%（文科省、2015年4月1日現在）

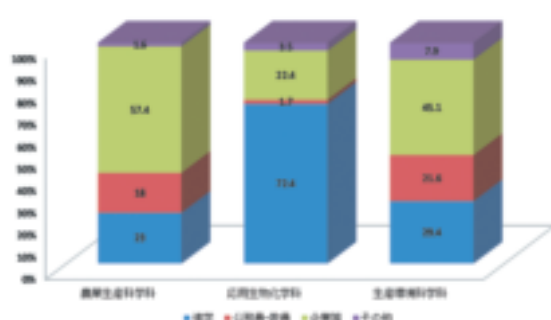


図2 農学部2014年度（2015年3月）卒業生の学科別進路状況（百分率）

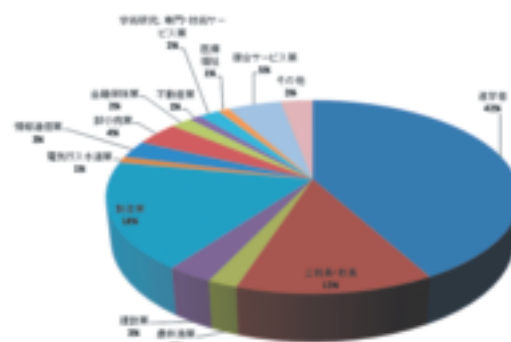


図1 農学部2014年度（2015年3月）卒業生の進路

表2 農学部2015年度の進路状況（2016年1月末現在）

企 業 等		公 務 員		大学院進学		その他（人）
希 望	内定率	希 望	内定率	希 望	内定率	
71 (40.8)	95.3	36 (20.7)	91.7	66 (37.9)	92.4	1

（注）括弧内の%は、学部4年生174名に対する百分率

また、2016年1月末現在の進路内定状況をまとめると表2となります。前年度の同時点で比べると、企業と公務員への志望がそれぞれ5名と10名ほど増え、大学院への進学志望が減り、学部4年生の37・7%の割合となっています。しかし、2月に第2次募集の大学院入試がありますので、大学院進学数がさらに増えると思います。また、これまでに、卒業式後の3月末に就職先が決まるといったケースもありますので、農学部就職専門委員会も、卒業論文研究の指導教員を通して、また新潟大学キャリアセンターと連携しながら、これらの学生の皆さんへの進路支援を進めています。

農学部では、就職専門委員会の活動を通して、学生が自身の適性と生き方について考え、就職活動・キャリアデザインに積極的に取り組めるよう支援しています。各学科2名の教員、学務係職員2名の計9名（委員長を含む）で構成されています。新学期の学年別ガイダンスや秋期ガイダンスなどを通して、ライフプランを考えるヒントや契機を提供するとともに、先輩たちや社会人の講演を通して、実際の就職活動に関する具体的な情報を身近に感じてもらえるなど、さまざまな活動を進めています。さらに、新潟大学キャリアセンターとの連携により、学部学生へのキャリア支援活動を進めています。